

# 新方地区の「新編武蔵風土記稿」

加藤幸一

雄山閣発行の「新編武蔵風土記稿」をもとに作成した。

( ) 内の文字及び※の文章は、加藤が加筆した。

おおよし

## ○大吉村

※ここは新方領に属する。

おおよし

大吉村は、江戸より行程六里半、家数三十余、村の広さ東西三町半、南北十四町、南

は葛西用水堀を隔て増林寺(「村」の誤り)に隣り、北は向畑村にして、西は弥十郎村、

東は古利根川を限りて、対岸葛飾郡松伏村なり、用水は増林村より引来れり、古より御

料(所)にして、検地も前村(増林村、寛永四年・一六二七)に同じ、

高札場 北の方にあり、

古利根川 東方を流る、是当郡(埼玉郡)と葛飾郡との堺にて、幅六十間許、川傍

に堤あり、堤上より望めば、増林村関枿(「関枿」の誤り)の辺より川

二つに分れ、一は本流にて、一は葛西用水の方へ流れ、夏向は、松伏領敷

村の桃樹千株打並び、花の頃は景色いとよし、

香取社

○稻荷社 共(香取社・稻荷社)に徳蔵寺の持、

※大吉村の鎮守の香取社は、寿橋そばにあったが、現在は徳蔵寺のそばの県道平方東京線の古利根川側道路沿いに移転。稻荷社は移転してきた香取社あたりにおいて、当時の古利根川の中の小島に置かれていた。現在は陸続きとなっている。徳蔵寺の前を通る、かつての川沿いの半円形の小道が

現在も残る。

徳蔵寺

新義真言宗、山城国醍醐三宝院の末、青龍山と号す、開山青宥、本尊は十一面

観音を安ぜり（安置する）、立像にて長二尺ほど、恵心の作、

庵 十一面観音を安ず、

## ○向畑村

附持添新田

※ここは新方領に属する。

※持添新田とは、「反高はあるが新田村居の農民が不在の土地」

（秋葉一男氏『見沼の歴史』の見解より）

向畑村は古へ近村大吉・川崎・大杉・大松・船渡等の五ヶ村の向畑（向かいの、向

うの畑地）にて、その村々（大吉村・川崎村・大杉村・大松村・船渡村）持添の地なりし

を、いつの頃にや（大吉村・川崎村・大杉村・船渡村より離れて）一村に立しをもて、か

く名付しと云、されど正保（一六四四〜四七）の頃の郷帳には見え、元禄（一六八八

〜）改正の国図に其名初めて見ゆれば、其一村立し年代推て知らる、江戸より行程七里半、

民戸六十余、村の広さ東西十町余、南北二町余、東は増林村、北より西は川崎村に隣り、

西は大杉村、南より西へかゝりては弥十郎村、巽の方は大吉村なり、水利は松伏溜井よ

り引く、古より御料所なり、検地は前村（大吉村）に同じ、又弥十郎村の□（「地」か）

に当村の飛地あり、この余（飛地）持添新田ありて明和七年（一七七〇）遠藤兵右衛門、

検地せり、

高札場こうさつば

中ほどにあり、

小名こな

根堀

古利根川ふるとねがわ

東の方を流る、幅八十間許ばかり、

香取社かとりしゃ

村の鎮守、

※現在も新方小学校のグラウンドより東南東二百メートル先にあり。

末社まつしゃ

妙儀みょうぎ

稻荷いなり

雷電らいでん

疱瘡神ほうそうがみ

○千蔵院せんぞういん

新義真言宗、葛飾郡野田村金乘院こんじょういん門徒梅龍山と号す、本尊不動、

※現在の十一面観音堂一帯にあったと思われる。現在、不動三尊像や不動明王の「三十六童子」と刻まれた石仏がその名残を残している。

水神社すいじんしゃ

観音堂かんのんどう

○華光院けこういん

同宗（新義真言宗）、是も野田村報恩寺ほうおんじ門徒、山王山さんのおうさんと号す、本尊薬師、

※現在の堂面の観音堂一帯にあった。「花光院」とも書く。

山王社さんのおうしゃ

観音堂かんのんどう

## ○川崎村 かわさき

※ここは新方領に属する。

川崎村は、江戸より八里の行程なり、民戸五十余、東西十町許、南北は三町にすぎず、南は向畑村にて、西は大松村、東より北へは古利根川を廻らし、川の向は葛飾郡大川戸村なり、(家康の)御入国(天正十八年、一五九〇年)以来、御料所にして今もかはらず、用水及び検地の年代等前村(向畑村)におなじ、

高札場 中程にあり、

古利根川 村の東北を流る、川幅八十間許、

香取社 村持鎮守なり、本地十一面観音を安ず(安置する)、

※現在の川崎神社である。

末社

稲荷

吾妻権現

※北川崎の観音堂の裏(北東)、古利根川沿いの権現河岸にあった。地元の桃の出荷地でもある。地元ではこのあたりを「権現様」と呼んでいる。

雷電

疱瘡神

金毘羅

正福寺(「正徳寺」の誤り) 浄土宗、大松村清浄院末、太子山と号す、本尊阿弥陀を

安ず(安置する)、

《大子山聖徳寺

開山源伝

慶長二年六月廿二日相果

出典 「元禄八年十一月 大松清浄院等開山并由緒書」

『越谷市史三 史料一』八七五・八七六頁

※「聖徳寺」においては寺院の名称を変更したとの言い伝えはない。「聖徳寺」は、明治の迅速図には「正徳寺」と記載されている（秦野秀明氏の指摘）。ゆえに新編武蔵風土記稿の「正福寺」の記載は誤りである。明治前半に調査され戦後になってから編集発行された「武蔵国郡村誌」では「聖徳寺」と記載されている。江戸時代は「聖徳寺」の文字も見られる（「元禄八年十一月 大松清浄院等開山并由緒書」、「白龍山日記録」の四月廿日より・秦野秀明氏の指摘）ことから、本来の「正徳寺」より「聖徳太子」信仰と結び付けて「聖徳寺」とも書かれたのであろう。

太子堂

○大松村

※ここは新方領に属する。

大松村は江戸より七里、民戸十八、村の四隣、南は大杉村、西北は船渡村、東は古利根川を隔て、葛飾郡大川戸村なり、当村も古より御料所なりしを、宝暦年中（一七五一〜

六三）大岡出雲守に賜ひ、今子孫主膳正の領分なり、用水検地は前村（川崎村）に同じ、

高札場

中程にあり、

古利根川

東北を流る、幅八十間、

香取社 かとりしゃ

村の鎮守にて、向畑村華光院の持、  
ちんじゆ けこういん もち

末社 まつしゃ

稲荷 いなり

清浄院 しやうじやういん

浄土宗、芝増上寺末、栄広山浄土寺と号す、寺領十二石の御朱印は、慶安元  
じりやう ごしゆいん がん

年（一六四八）九月十七日賜ふ、本尊阿弥陀を安ず（安置する）、立像にて  
たまう りゆうぞう

長三尺許、恵心の作といへり、開山堅真（賢真）、宝徳元年（一四四九）七  
ながさんじやくばかり えしん かいさんけんしん ほうとく

月廿八日示寂す、  
じじやく

《寺領十二石の御朱印は、慶安元年（一六四八）九月十八日頂戴  
じりやう ごしゆいん がん

開山賢真上人

嘉慶元丁卯年七月廿八日遷化

出典「元禄八年十一月 大松清浄院等開山并由緒書」

『越谷市史三 史料一』八七六頁

当寺の東、少許を隔て、開山塚と云あり、そこより掘出せし古碑（板碑）  
すこしばかり へだ かいさんづか いう ほりだ こひ

に、嘉禄元年（一二二五）の文字見えたり、是起立の人の碑ならんと云、  
かろく これきりつ いう

※ここである嘉禄元年の古碑（板碑）の所在は不明である。

なお、開山上人の碑と伝わる板碑が現在も保管されている。これが嘉禄元  
年の古碑かもしれない。以下、紹介する。

## 賢真上人の開山塔の板碑

次のように刻まれている。

(梵字サ)

光明遍照  
十方世界

(賢真カ)

念仏衆生

(梵字キリーク)

□□上人

(梵字サク)

撰取不捨

### ◎頂部

山形をした頂部は、すでに破損していて欠けている。

### ◎塔身部の上部

賢真上人の開山塔に使われていたもので、中央の判読できない文字は、賢真上人と刻まれていたと伝わる。  
ロマンをそそる。

### ◎塔身部の下部

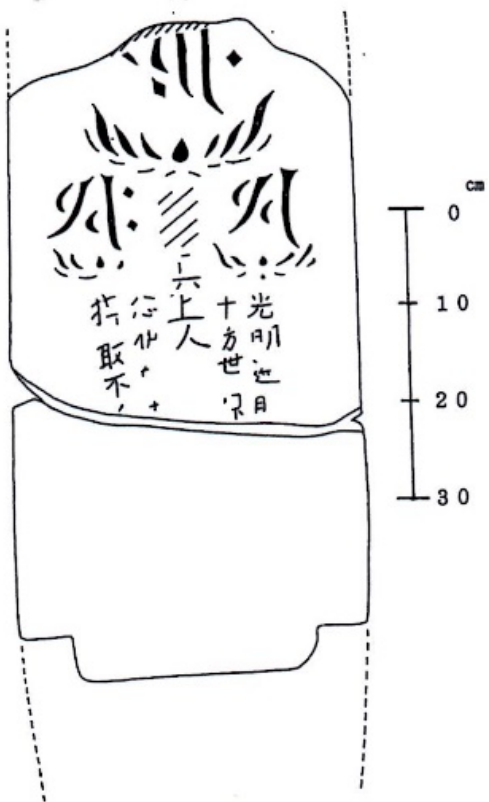
中程から割れたうちの塔身部の下部の方は、解読不能である。  
ここには、年号や年月日などが刻まれていたと思われる。

### ◎基部

板碑として地面に立てる場合の土中に入るべき基部は、欠けている。  
開山塔の上部にはめ込めるようにと基部を加工したためである。

### ◎補修

塔身部の中程に、割れた塔身部の上下の部分をつなげた跡がある。これは岩井茂氏によって補修された跡である。



古利根川

ふるとねがわ 村の東を流る、川幅前村（大松村）に同じ、

稲荷社

いなりしゃ 村の鎮守なり、浄閑寺の持、

末社

香取

天神

○稲荷社

いなりしゃ 同寺（浄閑寺）の持、

浄閑寺

じようかんじ 浄土宗、大松村清浄院の末、小池山と号す、本尊阿弥陀、開山龍文（「龍天」

の誤り）、文禄二年（二五九四）四月八日寂す、

《医王山浄閑寺

開山竜天

文禄貳年巳四月八日相果

出典「元禄八年十一月 大松清浄院等開山并由緒書」

『越谷市史三 史料一』八七六・八七七頁

※現在の太杉神社の裏、大杉第二集会所あたりにあった。

○了閑寺

りようかんじ 浄閑寺の末、薬師山と号す、本尊薬師、

○妙音寺

みょうおんじ 新義真言宗、葛飾郡松伏村浄栖寺（静栖寺）の末、本尊不動、楊柳山

と号す、開山の僧詳かならず、開基は葛飾郡松伏村の民、民部の祖

先民部にして、法名道忠法眼と号す、延宝四年（一六七六）六月廿

四日死せり、この道忠は仏法帰依のものにて、当寺を始めすべて

廿一寺を創立せり、



※現在の<sup>にいがたがわ</sup>新方川右岸、大杉九〇九番地あたりにあつた。

## ○弥十郎村<sup>やじゅうろうむら</sup>

※ここは<sup>にいがた</sup>新方領に属する。

弥十郎村は、<sup>きんごうおおふさ</sup>近郷大房村の民、弥十郎と云者の来て開きし故、名とせりと、されど<sup>しょうほう</sup>正保の頃（一六四四〜四七）は伊奈半十郎支配すといへば、此以前の<sup>この</sup>開発なるべし、江戸よりの行程検地等前村（大杉村）に同じ、<sup>みんこ</sup>民戸二十、村の四境、東は<sup>おおよし</sup>大吉村、西は<sup>おおさと</sup>大里村に続き、南は大沢町に隣り、北は<sup>おおとまり</sup>大泊村なり、用水は<sup>ましばやし</sup>増林村より引来れり、元より<sup>ごりようしよ</sup>御料所にして、今も<sup>おだいかん</sup>御代官支配す、

<sup>こうさつば</sup>高札場 西の方にあり、

<sup>いなりしや</sup>稻荷社 村の鎮守なり、<sup>かんしょうじ</sup>観照寺の持、

※弥十郎にある現在の<sup>いなりしや</sup>稻荷神社。

○天神社 同寺（<sup>かんしょうじ</sup>観照寺）の持、

<sup>かんしょうじ</sup>観照寺 新義真言宗、<sup>すえだ こんごういん</sup>末田村金剛院の末、<sup>いなりさん</sup>稻荷山と号す、<sup>だいにち</sup>本尊大日、

○地藏堂 前寺（<sup>かんしょうじ</sup>観照寺）の持、

※現在、地元で「やぼ」と呼ばれている共同墓地（弥十郎交差点から南へ百メートル先）にある。八月二十四日の前夜にお堂に参詣する信仰がみられる。

## ○船渡村<sup>ふなと</sup>

※ここは<sup>にいがた</sup>新方領に属する。

<sup>ふなと</sup>船渡村は、江戸よりの行程検地の年代等前村（<sup>しもまくり</sup>下間久里村、行程は江戸より七里余、検地

は寛永四年・一六二七)に同じ、東は大松村、西は平方村、南は下間久里村、北は古利根川を隔て、葛飾郡赤沼村なり、東西十四町余、南北十一町、民戸百八軒、葛西用水を引沃り、爰も前村(下間久里村)と同く昔より御料所なり、

高札場 村の中程にあり、

小名 福島新田 元禄改定の国図には、此新田をのせ船渡村枝郷とあり、されど今は

本村の高に合し、全き別村には非ずして、当村の小名となれり、

※福島新田は、船渡村の南部、千間堀左岸側の大杉橋北方にある地域。

枝郷とは枝村のことで、本郷(本村)は船渡村となる。

※福島新田について秦野秀明氏は次のように推定している。

・「岩付衆」の「福島氏」の指導の元、海老名家(屋号 福島)の先祖である海老名氏が、リーダーとして実際の開発を行い、一定の成果を上げた。  
・正保年間(一六八四〜八七)から元禄八年(一六九五)までの期間に、その後も引き続き海老名氏の子孫が、リーダーとして開発を行い、「福島新田」として「元禄改定の国図」に記載された。

上手組 下手組 大島組 新田組

古利根川 北の方を流る、幅四十間、此川の内用水あり、新方領十八ヶ村の組合にし

て、公よりの修理なり、

香取社二 一は村の鎮守にて、大泉院の持、一は無量院の持、

※二つの香取社は「武蔵国郡村誌」によると「村の中央」にあるということから、一つは無量院そば下手組香取社、もう一つは船渡二二二七の新方家の西隣あたりにあった神社で、船渡村の鎮守でもある。明治の迅速図では、その神社は「八幡祠」と書かれているが、「香取社」の誤りであろうか。  
なお、新方家文書「今般依懇願奉勸遷」によると「別当不動院境内二在之鎮守江奉勸遷」と書かれていて、不動院(村の鎮守の別当)の境内に村の鎮守があることがわかり、鎮守とは上手組の香取社をさすのであろう。

○天神社 てんじんしゃ 無量院持 むりょういんもち

※現在の船渡九二四の一と二の篠田家の東側に、小山の上にあった。現在はその名残は全くない。

末社 まつしや

稲荷 いなり

庚申堂 こうしんどう

※なお、船渡五〇六の「竜鮎」駐車場の北側には地元では「観音堂」と呼ばれる竹藪に覆われたお堂が小山の上にあったという。

ここでいう「庚申堂」は江戸時代にはこの地を指したのかもしれない。そのように仮定すると、いつの頃か「庚申堂」との言葉が「観音堂」へと変化し、庚申信仰から観音信仰に変化した可能性も捨てきれない。

山王社二 さんのおうしや 一は無量院、一は福王寺の持 もち

※福王寺持ちの山王社は、明治の迅速図をもとに推定すると船渡新田集会所の二五メートル南方にあったと思われる。建物の向きは、西側にあった古道（今は存在しない）に向いていたであろう。

○稲荷社 いなりしや 村民の持 もち

※稲荷社は、船渡字島添一八一の金谷よし子宅の駐車場あたりに小山の上にあった。この稲荷社より西側一帯は「稲荷前」と呼ばれるが、この稲荷社があることから名付けられたのであろう。

無量院 むりょういん

浄土宗、大松村清浄院の末 まつ、仏説山と号す、本尊阿弥陀、開山相雲、天正二年

(一五七四) 示寂 しやく

《仏説山無量院

開山相雲

天正二年八月廿二日相果

出典 「元禄八年十一月 大松清浄院等開山并由緒書」

『越谷市史三 史料一』八七六頁

○福王寺 ふくおうじ

新義真言宗、末田村金剛院の末、寿栄山と号す、本尊不動、開山 かいかん

義光、元文四年（一七三九）寂、  
げんぶん

※畑地だったところに建設された船渡新田集会所にある石仏群は、もとは船渡二八六の海老名家の南東側邸外あたりにあり、お堂もあったという（船渡二八六の海老名正雄氏）。船渡新田集会所の南方二五メートル先にあったと推定できる山王社の持ち主は福王寺なので、このお堂が福王寺の名残だったのであろうか。しかしながら薬師如来が安置されている船渡新田集会所には、福王寺の本尊である不動明王像が安置されていない。それゆえ福王寺とは断定できない。あくまで推測にすぎない。今後の研究に期待する。

○南泉院 なんせんいん

同宗（新義真言宗）、下総国葛飾郡木野崎村遍照院門徒、高富山と号 きのさき へんじょういん

す、本尊薬師、開山尊秀、宝永四年（一七〇七）八月十三日示寂、  
かいざん

※南泉院は現在の上組集会所あたりではないだろうか。

昭和三十五年発行の「越谷市の史蹟と伝説」では、「屋号が「不動院」と呼ばれる新方家には）古くは現在の広き屋敷内に大泉院、南泉院、不動院の三院がありたる由」と紹介されている。大泉院は現在の新方家敷地と推定し、その南の薬師を安置する上組集会所あたりに南泉院があつたと思われる。上組集会所の建物の西側隅部分あたりには、かつて薬師堂と呼ばれたお堂があつた所で、南泉院の名残であろう。

※「不動院」は、新方家の出である大杉一〇三の永野富美子氏によると、「新方家の裏にある墓地あたりにあつたと伝わる」とのことである。

不動院の境内の範囲は新方家文書の「別当不動院境内ニ在之鎮守江 これある  
奉勸遷」 かんせんたてまつる から、神社跡あたりまでとの可能性がある。

しかしながら、新方家の敷地に「大泉院」という寺院があり、大泉院を営む新方家の屋号を「不動院」と呼ばれたとも推測できる。

※「越谷市の史蹟と伝説」によると、新方家は大坂落城の男三人兄弟の落武者の一人であるといひ（もう一人は北葛飾郡金杉あたり）、新方家の菩提寺は安政二年（一八五五）までは野田市清水の当山派の「金乗院（こんじょういん）」で、その後は大松の清浄院（しじょうじょういん）に移つたという。金乗院の本尊は薬師であり、不動堂も見られる。金乗院に薬師や不動が安置されている点は、同じ当山派修験道の新方家も同様である。この関連性について今後の研究に期待する。

○龍正寺りゆうしょうじ

浄土宗、大松村清浄院おまつ しょうじょういんの末、弘福山こうふくさんと号す、開山かいさん玄勝げんしょう、慶長三年（一五九八）寂じやくす、本尊阿弥陀、

《弘福山竜正寺

開山玄正

慶長二申年開基

元和七年三月廿一日相果

出典 「元禄八年十一月 大松清浄院等開山并由緒書」

『越谷市史三 史料一』八七七頁

※現在の太鳥集会所あたりにあった。その近くに神社もあった。

この神社名は、明治の迅速図によると、「香取祠」と書かれているが、実は「八幡祠」で、新方家のそばに書かれている「八幡祠」と互いに書き間違えているのであろうか。

○大泉院だいせんいん

当山とうざん派修験はしゆげん、江戸青山鳳閣寺あおやまほうかくじ配下はいげ、玉林山ぎょくりんざんと号す、本尊不動かいぎ、開基

清覚しょうかく、弘治二年（一五五六）寂じやくす、

※「越谷市の史蹟と伝説」によると「当家（新方家）に、本尊不動明王開基清覚、弘治二年示寂の碑と修験行者の法螺貝仏具等が残存されて居ります。」と記載されている。

※大泉院は現在の新方家あたりにあったのであろうか。南泉院の項で前述したように、新方家の敷地に「大泉院」という寺院があり、大泉院を営む新方家の屋号を「不動院」と呼ばれたとも推測できる。※なお、「不動院」と「大泉院」との関係を秦野秀明氏は《「不動院」は「大泉院」の別称であった》として、不動院と大泉院は同一寺院であるとしている。その根拠として以下の3点をあげている。

① 『新編武蔵風土記稿』では、「不動院」の記載がなく、旧船渡村の鎮守である「香取社」が、「大泉院」の持であったという記載がある。

② 『新編武蔵風土記稿』では、「大泉院」の本尊が「不動」（注 不動明王）であったという記載がある。

③ 「新方家文書」では、旧船渡村の鎮守である「香取社」の別当が、「不動院」であったという記載がある。といった「三点」も、すべて説明が可能となる。